

「映文連アワード2022」受賞主要作品紹介

■最優秀作品賞（グランプリ）

変わるまち、変われるまち、石巻。feat. ジュン （9分42秒）

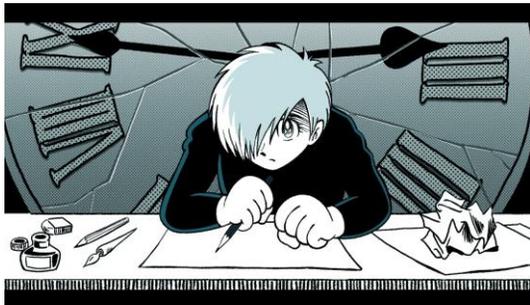
製作：株式会社ロボット

クライアント：石巻市

代理店：株式会社街づくりまんぼう／株式会社丹青社

企画：大和友大朗、木村 仁、高橋智之、佐藤千晃、澤島寿成、小山将史 プロデューサー：涌井 剛、大嶋美穂 ディレクター：稲葉卓也 脚本：平田研也 アニメーション：モノフィルム制作協力：石森プロ、小川勝久

【作品概要】映像化が困難と言われた石ノ森章太郎の漫画『ジュン』をモチーフにしたアートアニメーション。石巻市街地を見下ろす丘の上に立つ青年・ジュン。いつもスケッチブックを持ち歩きながらマンガを描いていたジュンの時計は、東日本大震災をきっかけに止まっている。沈んだ気持ちで街を歩くジュンだが、ふとした気づきから希望の光が見え、前を向いて歩き始める。



©石森プロ

【選考経緯】東日本大震災から10年、石ノ森萬画館が20周年を迎えたことを機に、「マンガ文化の街・石巻市」のブランド化を目指し製作された、石ノ森章太郎の漫画『ジュン』をモチーフにしたアートアニメーション作品。ストーリーらしいストーリーもなく、絵とコマの流れによって新たなイマジネーションを広げていく、謂わば〈記憶画〉の集成ともいえる実験的な作品であるが、主人公・ジュンの成長と震災復興への歩みを重ね合わせて、大震災で物理的にも精神的にも被害を受けた石巻の方々の復興を巧みに描き出した。少年・ジュンがふわふわフードの少女や大人になった美しい女性と出会うことによって、仕事の困難を乗り越え“希望”へと繋がっていくことを、落とし込み方が安易ではないかという意見もあったが、ナレーションやスーパーに頼らず、アニメーションだけの表現力によって、石巻の人々の復興への希いを壮大なストーリーとして描ききったことが高く評価された。

■文部科学大臣賞

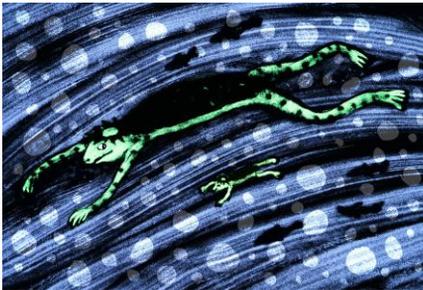
ガラッパどんと暮らす村 (16分53秒)

製作：若見ありさ

クライアント：宮崎県教育委員会／宮崎県立美術館

企画・監督：若見ありさ 語り・原作：竹原由紀子、山下盛親 原作：桑畑初也 題字：大村華舟 音響監督：橋本裕充 音楽：タカハシペチカ 録音：後藤良太 編集：大橋弘典 アニメーター：一色あづる、萩原慧

映像概要：コロナ禍の中で失われつつあるものの一つに「語り」がある。祖父母から孫へ、時には近所のお年寄りから伝わったその土地の物語には平穏な日常への願いが込められていた。昔から河童の民話が多く残る宮崎県都城市～三股町で取材等を交え河童を観た人の話や土地に残る民話を伺い、地元の語り部や陶芸家に語りを担当していただき制作。その土地の方言と共に文化として残るように子どもも観やすい形で制作した。



©Arisa Wakami

【選考経緯】日本各地には、柳田國男が著した『遠野物語』のように、各々の地域に根付いた民話や伝説がたくさんある。人々に恐れられながらも愛され続けている妖怪の河童もその一つ。この作品は、宮崎県三股町・都城市に残る河童にまつわる民話をアニメーション作家・若見ありさ氏によって、“ガラッパ”と呼ばれる河童の九州地方の方言を用いて、「ガグレ」「ごぜ溝のガラッパどん」「夕暮れの訪問者」「あくまきとがらっばどん」という4つの挿話を、地元の語り部の語りに載せて、線画や砂アニメーション、ペイント・オン・グラスなど様々な技法を駆使して創り上げた作品である。時に大胆に、時に繊細に、時に恐ろしく、時に可愛らしく、河童と人々の関わりを軽妙に見せてくれる。特に竹原由紀子さんの語りが素晴らしく、アニメーションと語りとがよくマッチして、何とも温かい気持ちにさせてくれる。コロナ禍で子供たちに語り聞かせることが難しい状態の中で、大人も子供も楽しめるアニメーション作品が生まれたことを称えたいと思う。各地に伝わる民話や伝説がこうした形で語り継がれていくことは、日本文化の記憶と伝承という意味合いからも、とても意義深いことと思われる。

■経済産業大臣賞

カニカマ氏、語る。(15分32秒)

製作：株式会社DASH

クライアント：株式会社スギヨ

代理店：株式会社FROGLOUD

プロデューサー：諏訪 慶、眞保利基、勝俣 円 ディレクター：平林 勇 脚本：平林 勇 カメラマン：長谷川友美 美術デザイン：水野谷重謙 照明：野村泰寛 録音：川田一成

映像概要：1970年代、能登の水産加工会社スギヨは人工クラゲの開発に失敗した。しかし、この失敗から生まれた発見があったからこそ、カニカマは誕生した。開発秘話を題材に、失敗続きのシェフへ英国紳士風の「カニカマ氏」がエールを込めて語り掛ける「カニカマ史」。同氏とシェフの会話からなる現代パートと、50年前の能登を舞台にした開発秘話を描く過去パートを交互に展開する。



【選考経緯】 多くの人々は、お馴染みの「カニカマ」が誕生した経緯を知らないと思う。それは創業380年を迎える能登の水産加工会社の人工クラゲ開発の失敗から生まれた。その開発秘話を、仕事に行き詰まった若い女性シェフと、「カニカマ」をモチーフにした英国紳士風の“カニカマ氏”との会話を通して、当時の再現ドラマという形で展開する。50年前、スギヨの研究者たちは失敗をものともせず、実験を繰り返し、ついに「カニカマ」の開発に成功する。そして消費地から遠いというハンディも営業活動で克服して、爆発的に売れる商品にしていく。失敗しても諦めず、自由でポジティブな発想で乗り越えていく姿は何とも爽快である。ややもすると、退屈で独り善がりになりがちな企業広報や社史紹介を、このような手法を用いることによってエンターテインメント映像に仕上げた力量を高く評価したい。この映像は、社員教育に有効であると同時に、この会社の商品を改めて再認識させ、若いシェフと“カニカマ氏”の当意即妙な会話等を通じて、仕事で悩む若い人たちへのエールにもなっていると思われる。

■優秀作品賞（準グランプリ）

Hair album（2分53秒）

製作：太陽企画株式会社

クライアント：タカラベルモント株式会社

代理店：株式会社博報堂

企画・コピー・脚本：横井優樹 脚本・演出：石川結貴 アニメーション演出・撮影：八代健志
美術：根元緑子 アニメーション撮影・照明：宇埜良、上野啓太 実写撮影：古長真也 照明：
大堀治樹 録音：菊池秀人

映像概要：とある美容室。伸びきった白髪の老婦人が来店する。美容師がチョキンとハサミを入れると、髪の毛が床にぼとり。すると切られた髪が集まって、若い女性の姿に。彼女の目線の先には、長年連れ添った夫との記憶が次々に蘇り始める・・・。



【選考経緯】 高齢の女性が美容室で髪を切る、そしてその切り落とされた髪が、パペットアニメーションによって変身しながら物語が始まる。女性の髪には、その人の人生や想いが宿ると言われるが、ここでは若い頃の夫との出会いに始まり、愛し合い、子供が巣立ち、やがて離別するという、主人公の人生の“記憶”が鮮やかに蘇っていく。その切り口と語り口がユニークであり、且つ髪の毛の質感を活かした繊細なアニメーションが大変素晴らしい。髪を切ると前向きな気持ちにさせてくれるというのが、その意味では理美容師さんの役割はとても大きい。これはコロナ禍の中で利用客減少に悩む理美容業界で働く人たちを元気づけるために、オンライン動画コンテストに応募することから生まれたというが、そのためか自由な発想の企画は、誰しもが抱くであろう“記憶”と“再生”という普遍的なテーマを、さりげなく描き出すことができた優れた作品である。

■優秀作品賞（準グランプリ）

ねお、町長になる

徳之島の天城町をバズらせろ！（26分42秒）

製作：株式会社南日本放送／太陽企画株式会社

クライアント：天城町企画財政課ふるさと創生室

プロデューサー：石井建人、藤村朗生、滝田英哉、栃原啓孝 ディレクター：伊原 亮、新井健介
カメラマン：谷田部大貴 録音：梶井隆介、岩重直人 脚本：政池洋佑 クリエイティブディレクター：伊原 亮

【作品概要】 世界自然遺産に登録され、手つかずの大自然が広がる天城町（鹿児島県徳之島）。別名アマパゴス。東京で活躍し若者に大人気のインフルエンサーねお（鹿児島県出身）が、ひょんなことから町長に就任…。過疎に悩む天城町を町民たちと協力し、自然や景観、温かさあふれる人々の姿をインフルエンサーならではの手法でバズらせる為に奮闘する全6話のストーリー。



【選考経緯】 世界自然遺産に登録された鹿児島県徳之島の天城町は、別名「アマパゴス」とも呼ばれる過疎に悩む町である。この作品は、その天城町の魅力発信を若者に人気のインフルエンサー“ねお”を起用して、バズらせようとしたWebドラマである。1話4分、6話から成り立つショートストーリーは、ノンフィクション・タッチの学芸会のような乗りの作りで継続的に発信されていく。“ねお”が「一日町長」に就任し、町の人々と「ハートキャッチスポット」を探していく過程は中々楽しくて、見る側もつい感情移入し、次が見たくなってしまうだろう。観光促進ムービーとしてよく出来ており、町長を始め多くの町民が参加して盛り上げており、島の地域活性化にも大いに役立っていくであろう。

■優秀作品賞（準グランプリ）

片袖の魚 （34分）

製作：東海林 毅（みのむしフィルム）

プロデューサー・監督・脚本・編集・CGI：東海林 毅 カメラマン：神田 創 照明：丸山和志 録音：佐々井宏太

【作品概要】自分を不完全な存在だと思い込み、自信を持ってないまま社会生活を送るひとりのトランス女性が新たな一歩を踏み出そうとする一。詩人・文月悠光の詩を原案とするささやかな物語を、性的マイノリティ当事者でもある監督の東海林毅が丁寧に短編映画化した。本作は新型コロナウイルス対策として少人数での制作に対応するため、全編にわたり国産スマートフォン1台のみで撮影が行われた。



©みのむしフィルム

【選考経緯】詩人・文月悠光の詩を原案として、トランスジェンダーへの理解を促すために作られた作品。熱帯魚関係の仕事をしながら、自分に自信が持てないまま暮らしているトランスジェンダーの女性が新たな一歩を踏み出すまでの歩みを描いているが、雄が雌に性転換する熱帯魚“クマノミ”が効果的に使われるなど巧みな構成で、出演者にトランスジェンダーの当事者を起用したことも成功している。コロナ禍によって少人数で制作され、全編スマートフォンによる撮影だったというが、映像は綺麗で撮影技術は高い。若干付け加えれば、主人公のキャラクターをもう少し明るい感じにすると、より希望感が伝わり、好きだった男性にサッカーボールを投げつけて、初恋に区切りをつける主人公の気持ちが、もっと自然に感じられたように思う。

■審査員特別賞

生きたかった、だから闘った。

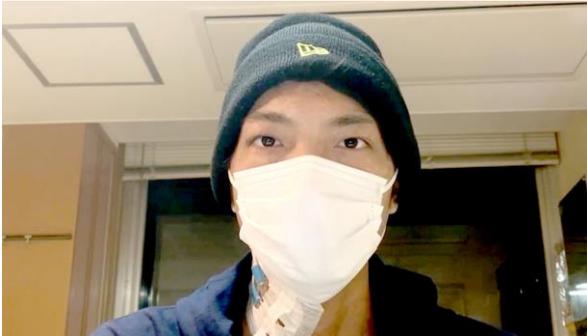
～白血病で早世した山口雄也さんのメッセージ～ (10分43秒)

製作：株式会社日テレ アックスオン

クライアント：日本赤十字社

プロデューサー、ディレクター、脚本、カメラマン、編集：元 安司 音響効果：石垣 哲

【作品概要】 2021年3月。京都大学学生の山口雄也さんは、白血病で余命宣告を受けた状況で、病室の中から動画メッセージを残した。自分の命が日々献血によって生かされている事。名も知らぬ献血者への感謝と、献血を推進する人々に向けた願いとは。ご両親の雄也さんに対する思いが伝わる遺品、インタビューから、短い人生を生き、鮮烈なメッセージを残した雄也さんの生涯をつづる。



【選考経緯】 白血病で余命宣告を受けた京都大学院生の山口雄也さんが、自ら発信した迫真の動画メッセージである。自分の命が名も知らぬ人の献血によって支えられていること、献血者へ感謝の気持ちを述べて、献血推進を呼びかけている。残された時間を意識した命がけの訴えは、見る人の心を強く打つ。本人がカメラに向かって語りかける映像がメインとなる、素朴な作りのドキュメンタリーであるが、献血推進の大切さを伝えるメッセージとして、長く記憶に残っていく作品である。出演された故・山口雄也さんと、ご両親の勇気と、製作者とクライアントの努力に敬意を表したい。